

ヨーロッパ・ツアー現地演奏会評(6)

「N響ヨーロッパ公演2020」の中から、2月22日に行われたタリン公演について、現地メディアによる演奏会評をご紹介します。

Postimees

February 25, 2020

Kai Taal

- ・ヤルヴィファミリーがエストニアの名を世界に広めたこれまでの貢献は計り知れません。
- ・パーヴォ・ヤルヴィはリハーサルとコンサートの両方において素晴らしい雰囲気を作り出すことができます。
- ・パーヴォ・ヤルヴィにはソリストとオーケストラ間のバランスを見極める並外れた能力があります。

パーヴォ・ヤルヴィ指揮、NHK交響楽団によるエストニアの首都タリンでの公演。チケットが最後の席まですべて売り切れ、満員となったエストニアコンサートホールは特別な雰囲気満ちていました。率直に言って、彼ら音楽家たちはここで大きな成功を得て、彼らの演奏は聴衆にとっても温かく迎えられました。しかし、私はこの日のコンサートに対して別の興味があります。

パーヴォ・ヤルヴィはNHK交響楽団の首席指揮者として5シーズン目を迎え、昨年秋、2022年まで契約を延長しました。

マエストロ・ヤルヴィと同楽団による前回のヨーロッパツアーは3年前に行われましたが、今回のツアーで初めてパーヴォ・ヤルヴィの母国エストニアを訪れました。ヨーロッパツアーの幕開けとなるエストニア、タリンでのコンサートの後、ヨーロッパの主要都市の名高いコンサートホールの数々がパーヴォ・ヤルヴィとNHK交響楽団の到着を待っています。ロンドン ロイヤル・フェスティヴァル・ホール、フィルハーモニー・ド・パリ、ウィーン・コンツェルトハウス、ケルン・フィルハーモニー、コンツェルトハウス・ドルトムント、アムステルダム コンセルトヘボウ、ベルリン・フィルハーモニー、ブリュッセル パレ・デ・ボザール。

このツアーには、エストニアのコンサートでも演奏したアルゼンチン出身のチェロ奏者、ソル・ガベッタと、ジョージア出身のピアニスト、カティア・ブニアティシヴィリの2人のソリストも登

場します。

小国であるエストニアの私たちについて、自身が思っているよりも広い世界でよく知られているようです。

世界各地を旅行すると、もちろんいつもというわけではありませんが、私の知り合い、友人との会話の多くが、パーヴォとヤルヴィという2つの言葉で始まりました。これまでパーヴォを含めヤルヴィファミリーがエストニアの名を世界中に広めてきたことへの貢献は計り知れません。世界的に有名な音楽家として、もちろん彼らはいずれにせよ世界市民ではあるのですが、エストニア人として自身を紹介し、さらにエストニアとエストニアの文化を世界に紹介したいという彼らの思いは感動的です。

NHK交響楽団によるコンサートの後、私は言葉の重要性について多くを考えました。どこから真の相互理解が始まり、それには言葉はどのような役割を果たすのか？何を語るか、どのように語るかが重要なのか？もしくは何も言わないでいいのか？

このオーケストラの仕事上の言語である英語は、パーヴォ・ヤルヴィやオーケストラの演奏家たちの母国語ではありませんが、彼らはお互いを完全に理解しているように思います。また、コンサート前のリハーサルを聞くことができたのは幸せでした。パーヴォ・ヤルヴィによってリハーサルとコンサートの両方において音楽家たちに良い気分を感じさせながら特別な雰囲気を作られていることを見ることができました。

パーヴォ・ヤルヴィは、オーケストラの音楽家たちから最高のものを引き出すことができます。そしてオーケストラの音楽家たちは積極的で、気配りがあり、献身的で、創造的でした。私自身、残念ながら、このような光景を普段ほとんど見ることはありません。私は指揮者と彼のオーケストラの間に感じる尊敬と愛に魅了されました。この尊敬と愛に満ちた関係は、特別で思い出に残るコンサートの前提条件です。そうでなければ、ただ単に音は聞こえるがそこには「生きた」音楽は存在しないでしょう。ほとんどの人が過去にそのような経験したことがあると思います。

コンサートのオープニングに演奏された武満徹の《How slow the wind》は、エストニアの聴衆に少しだけ日本の風景を運んできました。幻想的な音の世界の体験によって、おそらくもっとも有名な日本の作曲家である彼の音楽をさらに聴いてみたいと聴衆に感じさせたことでしょう。チェリストのソル・ガベッタはエストニアでの演奏を人々から長い間待ち望まれていました。この夜に演奏されたシューマン《チェロ協奏曲》における彼女の解釈は爽快で感動的でした。ガベッタは繊細で誠実なミュージシャンであり、ダイナミックなサウンドよりも色合いやディテールを好みます。この素晴らしいチェロ奏者のパートナーであるオーケストラが実に敏感で優れた音楽家たちの集まりであったことによって、彼女とパーヴォ・ヤル

ヴィの競演が成功したことは大きな称賛に値します。

エストニア劇場の一部として20世紀初頭に建設されたエストニアコンサートホールは、最近オープンしたエストニア音楽演劇アカデミー大ホールのように音楽家がよりリラックスして演奏でき、聴衆が優れた音を楽しめるような最新の音響特性を備えてはいません。それにもかかわらず、パーヴォ・ヤルヴィによってソリストとオーケストラのバランスをうまく調節し、ガベッタのチェロ演奏が一瞬ともオーケストラに埋没することなく、多くの柔軟性と遊び心、感性と深み、誇りと力強い表現、そして親密なタッチは驚くべき体験でした。そしてこの夜のクライマックスはブルックナーの《交響曲 第7番》の素晴らしい演奏で幕を閉じましたが、私はこれまでコンサートホールにおいてこれほど心を揺さぶられたブルックナーの音楽を聞いたことがありませんでした。パーヴォ・ヤルヴィは、重厚さと軽さ、歌唱、テクスチャーの明瞭さを組み合わせることができました。第1楽章の穏やかなテンポから、明確で説得力のある構築で魅惑的な音響世界を作り上げました。交響曲全体を通して作品の姿を見通すこと自体が大きな喜びでした。パフォーマンス全体を通じて、パーヴォ・ヤルヴィによる今回の演奏を聴く前には気付かなかった、悲しみ、時には強い悲劇の印象が残りました。最も美しい交響曲の1つであるこの作品への新鮮で魅惑的な音楽解釈は、間違いなく人々に長い間記憶されていくことでしょう。アンコール曲として演奏されたエストニア人作曲家ヘイノ・エツレルによる《祖国の調べ》の深遠な表現は非常に感動的でした。また2つ目のアンコール曲として演奏されたシベリウスの《悲しきワルツ》は爆発的なクライマックスによって短いが深く劇的なエピソードをもって演奏されました。